

本科 1 期 5 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 難関大国語



【問題】（演習）

出典：『古本説話集』／清泉女子大学・06年・改

現代語訳

今となつては昔のことだが、式部省の次官（である大江）匡衡は、学生で、たいそう優れた者である。（匡衡は）宇治大納言「〔源隆国〕のもとにいた。才能はたいそうすばらしいけれど、容貌はたいしたこともない。背が高く、怒り肩で、見苦しかったので、女房たちが、「あれこれ言つて（匡衡を）からかって、笑おう〔＝笑いものにしてやろう〕」と言つて、和琴「〔＝あづま〕と」を差し出して、「あらゆる事をご存知だということなので、これ〔＝この琴〕をお弾きください。聞きましょう」と言つたところ、（匡衡は次のように）詠んで、

逢坂の……私は逢坂の閑の向こうもまだ見たことがないので、東国のこととも知りませんし、あづま」と〔＝和琴〕の弾き方も知りませんよ

と詠んだので、女房たちは笑うこともできず、少しずつそっと（部屋の中に入つて（隠れて）しまつた。

同じ（人物である）匡衡が、官職を（希望し）申したけれど、なることができず〔＝望みがかなわないで〕嘆いていた頃、殿上人が、大井川に行つて、戸無瀬の滝に上つて歩き回つて遊ぶ〔＝逍遙する〕ままに、（そば仕えの）人々が歌を詠んだが、匡衡はこのように詠んだ。

河舟に……河の舟に乗つて満足する時には、官職につけず不遇で、気持ちが沈む身の上とも思われないよ
(匡衡は) 赤染衛門の夫である。

問1 容姿（容貌）

問2 てんじやうびと（てんじょうびと）

問3

- A 私は逢坂の関の向こうもまだ見たことがないので、東国のこととも知りませんし、あづま琴の弾き方も知りませんよ。
- B 河の舟に乗って満足する時には、官職につけず不遇で、気持ちが沈む身の上とも思われないよ。

〔いざれも解答例〕

問4

1 ≡ ④

2 ≡ ④

3 ≡ ②

問5

⑤

問6

匡衡に見事な和歌を返され、圧倒されると同時に恥ずかしくなったから。〔34字・解答例〕

【問題】(自習)

出典：『古本説話集』「上・五 赤染衛門事」／ 明治学院大学・経済学部・95年

現代語訳

今は昔（のこと）、赤染衛門という歌詠み（がいたが、彼女）は、（赤染）時望といった（人）の娘で、（藤原道長）入道殿に仕えていたが、不本意にも（大江）匡衡を夫として、（その匡衡というのは）たいそう若い博士であつた（が、その匡衡）を、（赤染衛門は）何事につけても、嫌つて避け、会うまいとしたが、夫（である匡衡の方）はあいにく思いが深くなつていく。（ある時、夫の匡衡が、彼の主君である道長）殿のお供で、住吉（神社）に参詣して、（赤染衛門に）詠んでよこした（歌は）、

恋しきに……（あなたが）恋しいあまりに、（風光明媚な）難波の（住吉に来た）ことも（何ということだとも）思われません。

誰が住吉の松（が美しいから、見惚れてしまうなど）と言つたのでしょうか（その住吉の松ではないが、だれが、私のところは住むのに快適だと言つたのでしょうか、それなら、あなたが逃げ回るはずはないのですから。でも、本当に、わたしの所は住みやすいので、いつまでもあなたが来ることを待っていますよ。住吉に来ても、あなたのことばかりを考えて、景色も目に入りません）（この歌を受け取った赤染衛門の）返事（の歌）は（次のようなものだつたとか）、

名を聞くに……（住吉という地）名を聞くと、（住みよいだけに、あなたは、きっとそこに）長居してしまって違ひない（そろぐらい住むのに快適だということですよ、住吉は。だから、こちらにいる必要はないので、帰つてこなくてよいのです。）住吉の松（が、それほど素晴らしいものだ）とは、（昔の）立派な（歌）人が言つていたのだつたかしら（その住吉の松ではないが、あなたのお宅が住みやすいから、待つているなんて言うのは、御立派な博士殿のあなたが勝手に言つてはなかつたのでしょうか。私は、住みやすいとは思つてませんよ）

（あまりにも赤染衛門が匡衡を嫌つて逃げ回るので、会うことが滅多になかつたので、（匡衡は）つらく思つて、稻荷神社の神主の（娘の）所へ通いなどし（て浮気をしてい）たが、（結局は、その娘も）意にそぐわなかつた。

匡衡は、（博士という学問系の職種で経済的に優遇されていなかつたが、その後収入の多い）尾張の国守などになつたので、たいへん羽振りがよくなつて、（赤染衛門の方でも）いつまでも嫌いぬくこともできなくて、（結局、子供の）拳銃などを生んでしまつたの

で、（赤染衛門は）幸せな人と（世間から）言われた。（匡衡が任国の）尾張の国へ（赴任するために赤染衛門を）連れて下る途中で、国守〔＝匡衡〕は（次の下の句を）つぶやいた。

十日の国に……（尾張までは十日の道のりというがその）十日（日には早く、尾張）の国に到着したいものだなあ

赤染衛門（の返した上の句は）

みやこ出でて……都を出てから今日で九日になつてしましました（だから、もうすぐ着きますよ）

解答

問1 お側にお仕えしていた [解答例]

問2 (二) 問3 あはじ

問4 住み良い（「住み良し」でも可。）

問5 匡衡

問6 減多になかったので／稀だったので／珍しいことだったので [いざれも解答例]

問7 (口)

問8 (イ)

問9 (ロ)

問1 「候ひ／ける」と品詞分解。「候ひ」はハ行四段活用「候ふ」の連用形。「仕ふ」の謙譲の意と「あり」の丁寧の意とがあるが、直前に「入道殿に」とあるので、貴人の側に仕えるの意の謙譲語。形の上からは「入道殿に」の「に」を断定の助動詞と考え、「候ひ」を丁寧の補助動詞とそれなくもないが、そうすると、「赤染衛門」という歌人は「入道殿でございました」となつてしまい、「赤染衛門」と「入道殿」とが同一人物になつてしまつて誤り。過去の助動詞「けり」も忘れずに訳出すること。

問2 「博士」は官職の一つで、学生（＝がくしょう）への教授や試験を行い、専門の学芸に従事した男性のこと。「赤染衛門」は女性であるし、「時望」と「入道殿」はこの話題には直接登場しない。また、「ないと若き博士にてありける」人を赤染衛門が「のがひ厭」うけれど、その男は「心ざし深くなりゆく」という直後との整合性を考えても、傍線部は（二）の匡衡のことだとわかる。

問3 「心ならず」も赤染衛門は匡衡を夫（「男」は「をのこ」と読み、「夫・恋人」の意をも表す）にする。不本意なことなので、赤染衛門はこの匡衡を嫌つて避けていたのだが、逆に匡衡は愛情が深くなつてゆく。当時の男女の恋愛を考慮して、平仮名三字という設問条件に照らせば、「あは（＝逢は）じ」が浮かぶだろう。設間に「原本から移した際の誤記」とあるのだから、「あらじ」とそれほどかけ離れた語ではないはず、と考えてみてもよいだろう。

問4はじめの歌の詠み手は匡衡である（これは、初句の「恋しきに」からも明らか）であるが、ここより前の部分で、匡衡は赤染衛門を恋しく思つてはいるが、相手からの愛情を期待できないことが読み取れる。とするなら、そのような匡衡の詠んだ歌が単に「住吉の松」という情景描写であるはずはなかろう。そのことに気付けば、「まつ」が情景の「松」と心情の「（あなたを）待つ」との掛詞であることが見えてこよう。では、「住吉」はどんな意味を掛けていると考えられるか。匡衡が赤染衛門を「待つ」のだから、自分の棲家を「住み良し」と言い、彼女を誘つてしているのである。

問5 匡衡の和歌に対する赤染衛門の返歌である。和歌の後を読むと、「逢ふことのありがたかりければ」とあり、この返歌の後も匡衡と赤染衛門との夫婦仲はよくなつていなことがわかる。とするなら、返歌は匡衡の歌に対する拒絶の内容になつてていると考え

られる。「〈住吉の松〉というわけではないが、〈住み良し〉といつて〈待つ〉と言う」のは匡衡であり（過去推量の助動詞「けむ」が使われており、詠み手の視界外（＝住吉）にいる人に対する推量であることもヒント）、匡衡が「私のことを勝手に〈待つ〉などと『言つたのであろうか』と、疑問の形で軽く揶揄する、つまり「あなたはそう言つたのだろうが、私はそろは思つてはいませんよ」と、匡衡を拒絶しているのである。あるいは、「まさる人」という記述から、傍線部は「いと若き博士」である匡衡を指していると考えてもよい。

問6 「ありがたかり／けれ／ば」と品詞分解。形容詞「有り難し」は、①珍しい・滅多にない、が原義で、そこから派生して②滅多にないほどすばらしい・尊い、の意が生じ、同時に③生きることが難しい、④困難だ、などの意をももつ基本的な古文単語。「逢ふこと」という主語につながるのは①しかない。過去の助動詞「けり」や接続助詞「ば（こ）は」然形に接続し、原因・理由を表す)」もきちんと訳出すること。直後で匡衡が「思ひわび」る理由となつている箇所である。

問7 「猛に」は形容動詞「猛なり」の連用形で、①勢いが盛んだ、②壮大だ、の意。単語の辞書的な意味がわからなければ、直前の「尾張の守などになりにければ」に注目する。それまでは「博士」であつた匡衡は、経済的にそれほど恵まれていなかつた（当時、学問に関わる職は経済的には優遇されていなかつた）のだが、国司になつて「猛にな」つたのである。その結果、赤染衛門も「え厭ひも果てず」なり、子どもまで生まれていることから考えても、正解は(口)。

問8 「幸人」とは、文字通り「幸せな人」の意であるが、特に「高貴な人に愛される幸せな女性」というニュアンスを含む。「守」という国司クラスは「高貴」とまではいかないが、そこそこの身分である匡衡に愛され、挙周という子どもの誕生までみた女性とは誰か。言うまでもない、赤染衛門である。

問9 傍線部は、「守」である匡衡の下の句に赤染衛門が付けた上の句。匡衡が「十日（で到着するという尾張の）の国に着きたいものだ」と詠んでいるのに対して、赤染衛門は「都を出て今日で九日になつてしまつた」と詠んでいる。夫婦仲がよくなり、夫と一緒に尾張の国へ下る心情であるのだから、(イ)や(ハ)はあたらぬし、(ニ)や(ホ)では匡衡との贈答にならない。

《補充問題》

現代語訳

問1 (1) 舎人が寝ていて足を狐に食われた。

(2) 鼎を抜こうとするが、まったく抜くことができない。

(3) 新大納言は顔色が変わって、さつとお立ちになった。

(4) 今日は都のことばかりが自然と思いやられる。

*鼎＝金属製の器。三本足が付いたものが多い。

問2 (1) 人をおびえさせようとして、恐ろしい感じに思わせようとするのであろう。

(2) 天皇はご覧になつて、たいそう驚きなさる。

(3) 殿は歩き回りなさつて、御隨身をお呼びになつて、遣水を掃除させなさる。

解答

- | | | | | |
|----|--------|--------|--------|--------|
| 問1 | (1) 受身 | (2) 可能 | (3) 尊敬 | (4) 自發 |
| 問2 | (a) 使役 | (b) 尊敬 | (c) 尊敬 | (d) 使役 |

●
メ
モ
●

【問題】（演習）

出典：『徒然草』第百十五段 ／ 埼玉大学 教養学部・経済学部

現代語訳

宿河原しゆくがはらという所で、ぼろぼろが大勢集まつて、九品くほんの念佛をお唱え申し上げていた折に、（そこへ）外から入つて来たぼろぼろが、「ひよつとすると、このお仲間の中に、いろをし房と申し上げるぼろがおいでになりますか」と尋ねたところ、その仲間のうちから、（ある者が）「いろをしは、ここにあります。そのようにおつしやるのは、どなたか」と答えると、「（わたしは）しら梵字と申す者です。わたしの師匠の何某と申しました人が、東国で、いろをしと申し上げるぼろに殺された（そうだ）と承りましたので、その人にお会い申し上げて、仕返し申し上げたいと思って、お尋ね申し上げるのです」と言う。（そこで、これを聞いた）いろをしは、「立派にも、よく探しておいでになりましたね。そうしたことが確かにございました。しかし、ここでお相手申し上げますと、（尊い）仏道修行の場を汚すことになります。この前の河原へ参り、対決しましよう。くれぐれも、付添いの方々「『見ている皆さん』、どちらにも御加勢なさるな。多くの人たちの迷惑となつては、仏事の妨げになります（から）」と口約束をして、二人は河原へ出て対決し、思う存分互いに刺し違えて、一緒に死んでしまったという。

（この）ぼろぼろという者は、昔はいなかつたのであろうか。近頃の世に、ぼろんじ・梵字・漢字などいった者が、その起こりであるとかいうそ�である。（このぼろぼろは）出家・遁世しているようでありながら自分への執着が強く、仏の道に入ることを願うよう見えて喧嘩・闘争にあけくれている。實に勝手気ままで恥知らずのありさまではあるが、（この二人のぼろぼろの話は）死ぬことを何とも思はず、（生に）少しも執着しないところが小気味よく思われたので、ある人が（わたくしに）語つてくれた通りに（ここに）書きつけておく次第です。

問1 お会い申し上げて、仕返し申し上げたい

問2 A=し B=けり C=しか

問3 (2) =二人（いろをし房としら梵字）は、一緒に死んでしまったということだ。
(3) =昔はいなかつたのであろうか。

問4 出家している者にふさわしく、生に執着しない点。

問5 (オ)・(カ)

現代語訳

何の思慮分別もないと思われる者も、（時には）価値ある一言を言うものである。ある荒々しい東国武士でいかにも恐しいようすをした男が、傍らにいる者に向かつて、「（あなたには）お子さんがいらっしゃるか」と尋ねた時に、（その傍らの者が）「一人も持つておりません」と答えたところ、（荒夷が）「それでは、（あなたは）しみじみとした情愛をご存知あるまい。（あなたが）人情を解さないお心でいらっしゃるかと（思うと）たいそう恐ろしい。（人間というものは）子どもがいるからこそ、様々な情愛がしぜんとわかるものなのだ」と言っていたのだが、まさにきっとその通りであるにちがいないことである。親子の情愛の道でなければ、このような（物の情趣を解しそうにもない）者の心に、いくつしみの心が生じるであろうか（生じるはずがない）。親孝行の心がない者も、子どもをもつてはじめて、親の気持ちを思い知るものなのである。

俗世を捨てた出家者で、（親族も縁者もなく）全てにわたってただ一人である人が、自由を束縛する（両親や妻子などの）繁累の多い人が何かにつけて（周囲の人々に対して）こびへつらい、欲が深いのを見て、ひどく軽蔑するのはまちがいである。その（繁累の多い）人の立場に立つて考えてみると、本当にいとしく思うような親や妻子のためならば、恥をも忘れ、盜みさえもきつとしてしまいますのである。だから、盗人を縛り上げ、悪事を処罰するばかりであるよりは、世間の人があなたが飢えないように、寒くないように、政治を行つてほしいものである。人間は、安定した財産を持たない時は、安定した精神でいることができない。人間は、どうしようもない状況に追い込まれて盜みをはたらく（ものである）。世の中がうまく治まっておらず、寒さや飢えの苦しみがあるなら、犯罪をおかす者は絶えるはずがない。人を苦しめ、法を犯させておいて、それを罰するようなことは気の毒なことである。

さて（それならば）、どのようにして民衆に恵みを与えることができるのかといふと「=いうならば」、上に立つ者が贅沢をし（無駄な）出費をすることをやめ、民衆をいつくしみ、農業を奨励するならば、下にいる者に利益がある（ような）ことは、疑いのあるはずがないことである。衣・食が世間並に満たされている上に悪事をはたらくような人を、ほんとうの盗人と言うべきなのである。

問1 荒夷（が）かたへ（のことを）

問2 荒夷

問3 親

問4 妻子・親

問5 軽蔑する〔解答例〕

問6 いとしいような〔解答例〕

問7 政治（治政・行政・統治なども可）

問8 ①||寒さ ②||飢（饑）え

問9 罰

問10 ニ

問11 き

解説

問1 文の基本構造を理解し、動作主体などを明確にする問題。冒頭付近の「ある荒夷」と「かたへ」との対話を追って読んでいこう。「荒夷」は「かたへ」に向つて「御子はおはすや」と尋ね、「かたへ」が「一人も待ち侍らず」と答える、そこで荒夷が「いと恐ろし」と答えたわけだから、「誰が」にあたる答えは「荒夷」。また、「いと恐ろし」の内容にあたる部分は「さては、もののあはれは知り給はじ。情けなき御心にぞものし給ふらん」であるが、尊敬語「給ふ」を繰り返し使つてているように、対話の相手である「かたへ」のことを「いと恐ろし」と思つていることがわかる。「もののあはれ」「情け」「よろづのあはれ」は「子ゆゑにこそ」わかるようになる、この荒夷の一言に、作者兼好は「よき一言」という評価を与えて いるのである。

問2 指示語の内容を問う問題。傍線部2を含む一文を解釈の上、前文との関係から内容を明らかにしていく。「恩愛の道ならでは」とは、「親子の情愛の道でなかつたら」の意。「かかる者の心に慈悲ありなんや」とは、「このような者の心に、いつくしみの情が生じるはずがない」の意（反語表現「あり／な／ん／や」に注意）。いくくしみ、慈悲の情を解さない（子どものいない）者などが恐ろしい、と語っていたのは「荒夷」だから、「かかる者」とは「荒夷」を指しているのである。

問3 空所補充の問題。空欄を含む一文の理解によつて解ける場合と、前後の文との関係までを考慮に入れて解かねばならない場合が

ある。ここは前者。「孝養の心なき者も、」とは「親孝行の心がない者も」の意。「子持ちこそ、～思ひ知るなれ」とは、「子どもを持つてはじめて、～思い知るものなのである」の意（係結び「こそ」～「なれ」に注意）。親孝行の気持ちがない者も、子どもを持つとわかるのは「親の」気持ちである。空欄Aに入る漢字一字の語とは、したがって「親」となる。

問4 「ほだし」を具体的に表している語を文中から一つ選ぶ問題。「ほだし」とは、つなぎ止め、束縛するものの意で、手かせ、足かけ、綱などの道具といった物理的自由を奪うものと、人間が社会生活を行つていくうちにできた様々な人間関係のような心理的理由を奪うものとに分けて考えるとよい。傍線部3を含む一文では、「世を捨てたる…よろづにするすみなる」人が、「ほだし多かる」人の行為を云々することは誤りであるという内容が書かれている。「するすみ」は注に、親族も縁者もなく、ただ一人であること、と記されているから、「ほだし多かる」とは対照的であることが明白である。そこで本文7～8行目を見ると「親のため妻子のため」とあるので、正解は「親」「妻子」とわかる。

問5 語句の口語訳の問題。「思ひくたす」とは、「思ふ」 + 「くたす」の複合語である。心の中で腐らせる意味から、悪い評価を与えることを表わす。「(心の中で)けなす」「見下げる」「軽蔑する」などの訳例が考えられよう。直接口に出して言うわけではない点で「あさむ」とは異なる。

問6 **問5**と同じ口語訳の問題。形容詞・未然形「かなしから」 + 助動詞「ん(む)」の連体形からなる。「かなし」とは、身近なものに対する感情が痛切に迫つて心が生き立てられるようすをいう。現代語の「悲(哀)しい」にあたる用例もあるが、この文脈では「親」や「妻子」にかかるため、「愛し」^{かな}「=かわいい、いとおしい」の意と考えられる。また、助動詞「ん(む)」の連体形の用法は、仮定や婉曲の訳し方「～たら」、「～ような」のいずれかを用いる。文が続く時は「～たら」(仮定)の訳出、体言でまとまつている時は「～ような」(婉曲)と覚えておくとよい。ここは後者、婉曲の訳し方を使ってまとめることとする。

問7 傍線部の解釈問題。「世を行ふ」を端的な漢字二字の熟語にして答える問題といいかえてもよからう。「世」とは、人の一生や世の中などの限られた期間や範囲をさすことばである。それを「^お行ふ」とは、支配者による一定期間の統治をさすと考えられるだろ

う。また、傍線部**6**の置かれた文脈から考えてみても「盜人を縛め、僻事をのみ罪」したり、「世の人の饑ゑず寒からぬやうに」したりすることだから、政治・統治・治政・行政・などの語句が正解例として考えられる。

問8 語句の説明問題。空所補充型であり、文中の語を用いて解答するので、比較的正解を見つけ易いであろう。「凍餓(とうたい)（の苦しみ）」の「凍」とは、「こおる」「こごえる」「さむい」「つめたい」の意をあらわす漢字で、氷をあらわす「**ン**（にすい）」と、音符「東(とう)」（かさなる意）からなる形成文字。ここでは衣服がなくこごえる意と考えられるから、本文8～9行目「寒からぬ」を使って「寒さ」という解答が導ける。また、「餓(だい)」は難しい漢字だが、単独では音が「餓（ダイ）」。食べることと関係のある「食」偏の、会意形声文字である。食べるものがなくて飢える意と考えられるから、やはり同じ本文8行目「饑ゑず」を用いて「飢え」と解答できよう。

問9 傍線部の解釈問題。傍線部**8**を品詞分解すると「罪なは／ん／事」となる。「罪なふ」とは、「罪」という名詞に接尾語「なふ」がついて、四段動詞化した語で「罰する」「処刑する」といった意。傍線部**8**を訳出すると「罰するよくなこと」となる。そこで、設問文の指定の通り解答欄の形式に合うような漢字一字を考えると、正解は「罰」となる。

問10 空所補充の問題。空所補充の問題は空欄を含む一文の解釈をもとにおこなう。空欄Bを含む一文には、「さて、いかがして人を恵むべきとならば、」の仮定条件句の部分がある。ここは「さて（それならば）、どのようにして民衆に恵みを与えることができるのか」というならば、」の意。この部分が「上のおごり／疑ひあるべからず」（結果）の部分と対応している。以下「上のおごり／勧めば」と「**B**」に利あらん事、疑ひあるべからず。」の二つの部分の関係を考えてみよう。「勧め」はマ行下二段活用動詞「勧む」の未然形。接続助詞「ば」との組み合わせで仮定条件となる。それが後の部分の「疑ひあるべからず」へと続くことで「もし／するならば、～は疑ひない」の構文となっているのである。「上(かみ)」が「民を撫で、農を勧めることが誰に利をもたらすか。選択肢のうち、口・ハは論外。ホの「人」は漠然としすぎているし、イの「農民」では民衆の一部にすぎない。ここは「上(かみ)」との対比にもなる「下」がふさわしい。

問11

空所補充の問題。空欄Cの直前が中途半端な形「いふべ」になつてているので、ひらがな一字を入れよということは、助動詞「べし」の活用形を見抜いて答えよというに等しい。こうした文末の活用形に関する設問は、係結びの問題であることが多い。そこで、空欄Cを含む一文を丁寧に見てゆくと係助詞「ぞ」が見つかる。したがつて文末は連体形となり「べき」。

《補充問題》

現代語訳

問1

(1) 行き続けて、駿河の国に到着した。

(2) 雨は止んだけれども、風がやはり吹いて舟を出さない。

(3) 道を知っている人もなく、迷いながら行つた。

(4) もし竜がいるならば、たやすく射殺して首の玉をきつと取ろう。

問2

(1) 前年は、このようにやつと終わつた。

(2) 日々が速く過ぎる度合いは他に比べるものもない。

(3) それでは早く都にお帰りなさいてください。

(4) 細々と（愛情深く）はないけれども、時々ものを言つて寄越した。

(5) 古人の中には、旅の途中で命を無くした人が多くいる。

(6) 大臣は、手紙をお与えになる。

解答

問1 (1) 「ぬ」：終止形 (2) 「たれ」：已然形 (3) 「る」：連体形 (4) 「て」：未然形

問2 (1) 完了の助動詞「ぬ」終止形 (2) 打消の助動詞「ず」連体形
(4) 完了の助動詞「り」連体形
打消の助動詞「ず」已然形 (5) 尊敬の助動詞「る」終止形